

## 非業の死とその受容 —新たな「死の文化」の創出—

波平 恵美子

### 1. 議論の要旨

人間はそれぞれの時代それぞれの社会において、死の向う側にある何かを想定してきた。その何かとは、神の世界であったりブッダの理念が支配する世界であったり様々である。現代では、死の向う側には何もない、つまり虚無であると考えer人々も多い。しかし、死の向こう側は虚無であることを肯定する人々であっても、自分が死んだ後にも他の人々は生き残り、自分が住んだ家や活動した空間は残り、自分が使用した道具もまた残り続けることにはこだわる。死の向こう側には何もなくとも、つまり自分の存在は無となっても、世界が同時に無とはならず、自分だけがこの世界から消え去るのだということに、多くの人は納得することができない。それが、死に対する人々の矛盾した行動や言語表現になって示されていると考える。

日本人の多くは、死後の世界について、もはやはっきりとしたイメージを持っていない。それにもかかわらず、自分の親しい人々や肉親が死んだ後、死んだ人々は「死者」として存続すると想定した言動を取る。しかし、「死者」が存続するとしたら、それはどんな姿をしていてどの様な存在の内容を持っているかという具体的なことまでは想定していない。ひたすら、「死者」は、生き残った自分たちの感情や行動を知っていて、その意味において自分たちと死者との間ではコミュニケーションが成立していると考えているとしか解釈できないような、言動を示す。それはまた、個人的な言動というのではなく、文化によって規定された形式、すなわち死者儀礼として示される。

ところで、死者儀礼は、日本のみならず死者儀礼を行うあらゆる文化において、死んだ人が生前社会的関係を持っていた人々を中心となって行われる。日本社会では、「家」制度の発達と共に死者儀礼は社会制度として発達して

きた。死者儀礼は生き残った家族親族にとっての最重要の義務となり、地域社会では相互扶助の最重要項目となって、社会集団の統合機能を高めると同時に、その機能を示すものとして理解されてきた。しかし、近代化のなかで家族親族の構造は変化し、地域社会の機能は著しく低下してきた。死者儀礼はここ半世紀の間に大きく変化したといってよい。そのことは、「死者」とのコミュニケーションの手段もまた変わらざるを得ないことを意味する。

さらには、コミュニケーションを取る「死者」との関係もまた変化していることが想定される。それが推測されるのは非業の死を遂げた人々への追悼儀礼であり、新たな死者儀礼の創出を推測させるものである。

## 2. 非業の死を遂げた者への儀礼と伝統的解釈

日本では、そして多くの外の社会においても、伝統的に、非業の死は「異常な死」であるとして病死や老衰による死或いは幼児のあっけない死とははっきりと区別されてきた。死はそれ自身が非日常の出来事であり異常な出来事であり不幸な出来事と考えられているのに、非業の死は、より大きな不幸でありより異常な出来事とされて、そうした死に方をした人には、通常のやり方とは違う特別な死者儀礼が行われてきた。その儀礼が意味するものは、①死によって生じた不浄性は一般の死よりも強いこと、②死者の霊がより激しく荒れ狂っていて自らの不幸や惨めさをより強く感じていることであり、従って、特別な儀礼的手続きによって死の不浄性を弱めたり、死者の霊を慰めたりする。また、より頻繁に死者儀礼が行われる。非業の死、異常な死とは具体的には事故による死、出産時の死、自殺、殺傷行為による死、そして戦死である。特別な儀礼とは、例えば、出産中に死亡した女性の身体の腹部を開き、胎児を取り出し、その後、藁で作った人形を入れ、取り出された胎児は母親の死体の脇に横たえて一緒に葬るなどした。またその霊は特に不浄性が強いので、遺族の力だけではその不浄性を取り去ることはできないとして、遺族以外の人の力をも借りて取り除くことが目的で、小さな水車を作り、道路際に置いて、通る人に水を掛けてくるくると回してもらおうことなどの儀礼が行われた。また、その遺体や遺骨や位牌が、通常の死に方をした人のそれから隔てられて祀られることもあった。

非業の死の中でも戦死した人はみずからの死を覚悟していた結果としての死であり、そもそも戦うという行為が死を前提としたものであり、その意味

では予測をしなかった事故死や出産中の死とは分けて考えられていた。戦死者の霊は、一般の死に方をした死者の霊が49年後には個別の死者の霊としてではなく「祖霊」という個別性を持たない集会的な霊魂になるのとは異なり、何時までも個別の霊魂として祀られた。また、日中戦争のころから、戦死者の墓標は、他のものとは違い頭部が四角錐に形取られていたり、正面が、外の墓標が例外なく西向きであったり南向きであったりするのに対して、戦死した方角に向けられていたりする。このように、それが通常の死に方をした者の霊を祀るのではないことを明示するような儀礼が発達していた。

### 3. 現代に於ける非業の死と儀礼の創出

ところで、こうした、異常な死に方をした、或いは非業の死を遂げた場合には特別な死者儀礼を行うことは現代でも頻繁に見いだされる。特に、大事故によって多数の人が一度に死亡した場合にはその傾向が著しい。国内で見れば、最も記憶に新しい事例として、2005年5月に起きた尼崎市の列車事故による非業の死である。現在でも折々に死亡現場での追悼儀礼の様子が報道されるので、具体的な様子が分かる。事故現場では、死が起きた日から数えて、7日目、14日目、49日目の伝統的な仏式の儀礼に加えて、1ヶ月目、5ヶ月目という折にも追悼儀礼が行われている。遺族のなかには、現場を訪れて花束を捧げ黙祷するといった個人的な追悼行為とは別に、現在では行われることが少なくなった、僧侶による月命日の儀礼を、親類知人を自宅に招いて毎月行っており、より頻繁な儀礼の遂行が見いだされる。

多数の人が一度に非業の死を遂げた場合には、慰霊を目的として、それまでは行われることの無かった新しい儀礼の形式が創出されることもある。20年が経過したが、1995年8月に起きた日航ジャンボ機の墜落事故では、毎年墜落した地点に近い場所で、遺族や関係者が追悼儀礼を行っており、その際、ペンライトを点灯して航空機が墜落した時刻に合わせて、空中に向かって振るという行為がなされる。それは、コントロールが利かなくなった機体の中で、死の恐怖におびえ続けたあげく死亡した人々の気持ちを想像し、その霊に向かって生き残った遺族が自分たちの存在を告げるという意味を持った新たな形式である。この儀礼が意味するものは、遺体は、それが部分でしかなかったとはいえ、火葬し、遺骨は墓に納められ、死者の霊は仏壇に、或いは墓に祀られているにもかかわらず、まだ空中に漂っていて恐怖におびえてい

ると想定し、その霊に対しての慰霊の行為であるし、死者と生き残った人々との間のコミュニケーションの成立である。

伝統的死者儀礼の中に、山で死んだ人の霊を慰めるためにはその霊をきちんと家に持ち帰ることが必要だということで、遺族をはじめ関係者が遺体を山から自宅へ運んだ後で、なおも死んだ現場に出向き、そこで「さあ、これから家に帰るぞ」と声を掛けて人を自分の背中に背負う格好をし、背負ったままの姿勢で自宅に帰り、靈魂を確実に連れ帰る儀礼を行った。しかもその一方で、死んだ人の遺体は、不浄性が強いということで、屋内には安置せず庭先に粗筵を敷いてそこで死者儀礼を行ったことが多く報告されている。毎年尾巢鷹山に登り慰霊行為を行う人々は、非業の最期を遂げた人の霊は何時までも死んだその場に留まると考えたかつての日本人と同じ死者の霊への信仰を引き継ぐ一方で、新しい儀礼を創出しているといえよう。

広島と長崎で原爆が投下された日に毎年行われる追悼儀礼は、戦後少しずつその形式を変えながら現在の形式に定着してきた。記念碑の近くに供えられる無数の折鶴も、被爆し亡くなった少女のエピソードにちなんで供えられ始めたものが、現在では被爆死した人々の慰霊と死者に対して生き残った人々が平和の誓いをすることのシンボルとなっている。このように、非業の死を遂げた人への追悼儀礼は、単に死者を追悼するというよりも、より強い死者へのメッセージ性を含んだ儀礼になる傾向を持つ。

海外でも、ニューヨークの高層ビルの同時爆破による死者の追悼には、異なる文化を背景とした人々が死者であったため、それぞれの文化的背景を持った遺族や関係者による様々な様式の追悼儀礼が行われていることが報道の映像から見て取れる。爆破され崩壊したビルの跡地にどの様な記念碑を建て死者を追悼するかについて多くの議論が行われたのは、死者を追悼するには、それが物であれ行為であれ、なんらかの形式が必要であることを示している。しかも、この事件の場合、死んだ人々とその遺族が文化的背景を異にするゆえ、多様な「死の文化」を包括するものでなければならない。そのために、多くの議論が必要であった。それは、死者を追悼するという行為が、生き残った人々にとって、自分はその事件で死なず今なお生きている意味を問いつつ直す行為であること、また、自分と関係があった人の非業の死は、自分の存在において何かが変化したことを認識し、それに対応しようとする行為だからである。その死に様が無惨であり突然であればあるほど、その死は残った人々により強くその死の意味を問うことになる。

#### 4. 死者への信仰とその政治性

多くの日本人が自分は無宗教であるとか信仰を持たないという。或いは仏教も神道も時にはキリスト教の儀礼もその場に応じて使い分ける。その場合には教義や教理に関心はなく、「民俗習慣」として儀礼的行為を行っているのであり、信仰から発した行為ではないと考えている。しかし、死者儀礼においては「死者」が存在することを前提としており、「人間が死んだ後も、その存在は無になることがなく何らかの形で存続する」ということを信じて儀礼を行うのは信仰行為以外のなにもものでもない。教義や教理についての知識や関心がないことは「無信仰」であることを意味しない。人が死んだ後も「死者」として存在し続け、何らかの形で自分たち生き残った者との間のコミュニケーションが儀礼を通して成立すると考えていることは、宗教的行為、信仰的行為である。

その意味で、日本政府の総理大臣や閣僚が靖国神社に参拝し、それが「公人」としての行為であれ「私人」としての行為であれ、戦死者の「霊」に今後とも日本の不戦と平和の維持を誓うという行為は、死者の霊の存在を信じているという意味において信仰以外のなにもものでもない。また、死者の存在を信じ、それへの語りかけや働きかけを行うことは、死者と自分との間に一定の関係を設定していなければ行うことは出来ない。つまり、死者は直接生きている人間に何らかの働きかけをしないにもかかわらず、死者への働きかけをする人間は、その行為を通して死者を自分が生きている現実の世界に位置づけ、自分との関係を設定し、自らの行為の意味づけを明示していることになる。

死者への信仰と信仰的行為が「政治性」を帯びると考えられるのは、死者の存在を主張することによって自らの位置づけが可能となるだけでなく、他の者が、そうした行為を批判することがすなわち死者を批判することになるため、そして、死者は批判され得ないが故に、行為者は自らに対する批判をかわすことができるからである。「死者を非難してはならない」（伝統的には「死者をむち打つ行為は許されない」という考え方は、批判や評価に聖域を設定することになるが故に極めて政治性を帯びている。

非業の死を遂げた人への批判が成立しないことは、死者は、時には生きている人間以上の影響力を発することにつながる。薬害訴訟や公害訴訟或いは労務災害の訴訟において、被害者の遺族がしばしばその遺影を裁判の場に持

ち込むことが見られる。それは遺影として示される死者の存在が、非業の死を強いられた者の無念や怒りを表現すること、そのことによって被害や公害が存在したことを証明しようとする手段として遺族が用いているのである。そのような行為を「あざとい」と考える人は少数であろう。なぜなら、多くの人は、その無念や怒りは遺族のそれであるとしても、その遺族の感情はまた死者の感情でもあると認めているからである。こうした死者の存在を前提とした様々な行為は、非業の死を逃げた人の追悼儀礼において再生産されていく。そして、現在のところ、死者が存在することの信仰が帯びる「政治性」は、現職の閣僚の靖国参拝を巡る議論に代表されるように、決して衰えることはない。

## 5. 「家」の祭りとしての祖先祭祀の衰退と死者儀礼の簡略化

日本社会で、遅くとも近世後期から一般庶民においても発達していたと思われる「家」の祭りとしての死者儀礼と先祖供養の儀礼は、現在では「家」制度の廃止と「家」イデオロギーの消失、産業構造の変化による人口流動、近代化の中で起きた家族規模の縮小化、親族関係の希薄化によって消失しつつあるといつてよい。祖先崇拜の儀礼だけではなく、家族や肉親の死に際して行われる死者儀礼は簡略化されただけではなく、地域共同体の人々や親族が担っていた、通夜や葬式での様々な役割は葬儀業者の手によって担われるようになり、死者儀礼が持っていた豊かな「意味」はもはや伝えられなくなってきている。また、一定の時間間隔において行われる死者儀礼は、その時間間隔そのものが「意味」を持っていたのに、親族の多くが遠方から来ることや、遺族もまた長い間仕事場から離れることが出来なくなったため、従来は取られていた時間間隔を無視して、死者儀礼を行うために（葬儀の後、火葬場から帰宅直後に初七日の儀礼を行うなど）儀礼の持つ「意味」は二重に失われようとしている。なぜなら、通夜にしる葬式にしる、細々した儀礼的行為の積み重ねが全体としてその儀礼の意味を形成するのであるが、その際、ある行為を誰が行うかが意味を形成することにつながる。しかし、それらを葬儀業者が行うと、嘗ての意味は失われ参列者には、また、遺族にさえ儀礼が持つ意味は伝わらない。こうした死者儀礼の変質に加え、単身世帯の増加は、やがては「遺族」そのものが存在しなくなり、公的機関の職員によって最低限の儀礼のみが行われるようになる事態も予測される。決して日

本の上に起きる現象ではないが、生き残った人々が、自分の生きていることの意味を考え思いつく機会を失うことになる。ウラジミール・ジャンケレヴィッチの著書『死』によれば、「第一人称の死」すなわち自分の死を体験することも語ることもできない人間は、自分にとって最も大切な人の死「第二人称の死」に際して、自己の存在をとらえ直すという、人間が普遍的に行っていた行為が不可能になる。

## 6. 非業の死と新たな「死の文化」の創出

ところが、こうした変化を補うかのように、自分の家族や親族では無く、知人でさえないにもかかわらず、非業の死を遂げた個人の死に際して、多くの人々が頻りに追悼の行為を行うことが見られる。海外では、イギリスのかつて王室のメンバーであったダイアナ元皇太子妃の非業の死、日本では有名な俳優やタレントの自殺や突然死に際し、血縁や親族関係でもなく仕事上の知り合いでもなく、つまり生前全く関係を持たなかった人々が、追悼のために葬儀場や死亡した現場を訪れる。こうした現象は尼崎の列車事故現場でも見られ、あるテレビ局のニュース番組において、事故から3日たった時点で、全く関係ない者だがと前置きして、中年の男性がレポーターの問いに次のように答えていた。「今自分の居場所が分からなくなっているの、ここに来てみたら自分の居場所が分かるかなと思って来ました。亡くなった人たちの家族が泣いている姿を見ると、なんだか自分の居場所がわかったような気がします」と目に涙を浮かべている様子が放映された。こうした行為は、人間が、全くの他人の死であっても、突然生命が断ち切られることに、極めて大きな衝撃を受けるということを示している。そこでは、家族や親族の死に際して伝統的に行われていた死者儀礼とは形式の異なる、新しい形式を持った死者儀礼が創出され、それと共に、人の死についての新しい「意味」もまた創出されていると考えられる。先に述べた1985年の日航機の墜落事故において遺族は様々な形で自分たちが納得行くような儀礼を創出している。それは時代の変化を映し出すし、儀礼を行う人たちの置かれている社会的環境によっても差異があり、多様な儀礼が見られるのである。マスコミの報道、特にテレビの映像を通して日本の多くの人々はそれを知ることになり、どこかで再現されやがて定着していく。死亡事故の現場や死体の発見現場に花束を供えることは全国で定着し、道路際に置かれた花束を見る人はそこで交通

事故による死亡者がでたことを知る。こうして、死者儀礼の形式や儀礼の対象さえ変化し、その社会的機能は日々変化しつつあるが、「死者の存在」と「死者と生き残った者との間に交わされるコミュニケーション」とは、現在の日本でもまだ「死を思う」強力な手段として成立していると考ええる。

(なみひら・えみこ お茶の水女子大学名誉教授)